

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XI, 2007

国際仏教学大学院大学研究紀要  
第11号（平成19年）

安息国・安国とソグド人

齊藤  
達也

# 安息国・安国とソグド人

齊藤達也

## はじめに

筆者は以前「魏晋南北朝時代の安息国と安息系仏教僧」（以下、前稿と呼ぶ）の中で、漢文史料中の安息国の実体とその変化を論じ、中国で安息国とブハラの同一視が六世紀中頃に一般化したことを明らかにした<sup>①</sup>。そしてこの一般化は、直接の原因は不明としたものの、背景に当時のソグド人の中国流入・定着の増大があると推定した。この同一視はもちろん史実に反しているが、筆者はその原因に引き続き興味を持っていた。そして前稿発表後その解明を進める過程で、両国の同一視は、西域地理について漢人自身が南北朝時代までに得た情報・知識よりも、むしろソグド安姓成立との間に深い関係があったのではないかと思いついた。本稿では、これを新たな出発点として、ブハラと漢代の安息国の同一視の生じた原因を論ずることにする。

第一節では、安息国・ブハラ（安国）関係の、前稿では扱わなかった漢文史料を取り上げる。まず漢文史料に記録された漢代の安息国とソグディアナとの地理的關係を再確認する。さらにその後の安息国・安国関係の史料として、「安国楽」に関する音楽関係史料、『隋書』西域伝の安国の条等を考察する。

第二節では、漢代から南北朝時代にかけての安姓の胡人の記録を考察し、その出自の解釈とソグド安姓成立時期の推定を行う。

第三節では、前節までの考察結果を考え合わせて、ブハラと安息国の同一視が生じた原因を述べることにする。

## 第一節 安息国・安国の地理的考察

### (一)

漢代に安息国の名を最初に伝えるのは『史記』である。『史記』卷二二三、大宛列伝には、

大月氏在大宛西可二千里、居媯水北。其南則大夏、西則安息、北則康居。行国也。∴（中略）∴安息在大月氏西可数千里。其俗土著耕田、田稻麦。蒲陶酒。城邑如大宛。其属小大数百城、地方数千里、最为大国。

臨媯水。有市民商賈。用車及船、行旁国或数千里。以銀为钱。钱如其王面。王死辄更钱效王面焉。画革旁行、  
以為書記。其西则条支、北有奄蔡・黎軒。〔『史記』卷二二三、大宛列伝〕

とある。これは張騫が大月氏で得た情報によるものであるから紀元前一二九年頃の状況である。これによると、安息国は大月氏の西に位置し、媯水に接しており、国土が広く都市の多い大国であるとされている。また国内では王の肖像のついた銀銭が流通し、横書きの文字が使用されていたという。安息国は古くから周知の通りパルティア帝国を指す<sup>④</sup>。そして媯水はアム川である。パルティア帝国の国土の中心から判断すれば、「臨媯水」は、国土の東北界がアム川西岸までであったことを意味する。一方ソグディアナはアム川より東方にある。したがって『史記』によれば安息国（パルティア帝国）の領域はソグディアナに及んでいなかったことになる。同書にはソグディアナに当たる地名は出てこないが、先行研究によれば、張騫の大月氏到着当時ソグディアナは康居が大月氏

の支配下にあったと見られる。<sup>⑥</sup>

前漢のその後の情報を含む『漢書』巻九六西域伝下では、安息国と媯水の位置関係について『史記』とほぼ同じ記述がなされている。『漢書』にもソグデリアナに当たる地名は出てこないが、同伝中の「康居五小王」の全体あるいは一部がソグデリアナ諸国であるという意見がある。<sup>⑦</sup>

続く後漢の時代に関しては、『後漢紀』・『後漢書』に安息国の記述がある。<sup>⑧</sup>『後漢書』巻八八西域伝、安息国の条には、

安息国居和犢城、去洛陽二万五千里。北与康居接、南与烏弋山離接。地方数千里、小城数百、戸口勝兵最為殷盛。其東界木鹿城、号為小安息、去洛陽二万里。章帝章和元年、遣使獻師子・符拔。符拔形似麟而無角。

和帝永元九年、都護班超遣甘英使大秦、抵条支。…(中略)…十三年、安息王万屈復獻師子及条支大鳥、時謂之安息雀。(後略)

とある。これは班超が活躍した紀元後一世紀末の情報であろう。<sup>⑨</sup>安息「東界」の「木鹿城」はメルヴとするのが定説であり、<sup>⑩</sup>メルヴはアム川からかなり西方に離れたところにある。そうするとこの史料からは、当時メルヴがパルティア帝国の東境部とされる以上、アム川よりさらに東方のソグデリアナが帝国の領域内であったとは解釈できない。

さらに同西域伝には、

粟(粟)弋国属康居。出名馬・牛・羊・蒲萄衆菓。其土水美、故蒲萄酒特有名焉。

という一節がある。この「粟弋」はソグデリアナを指す音写語と認められるので、後漢時代にこの地が康居に服属していたことは明らかである。<sup>⑪</sup>

以上のように前漢・後漢の西域関係の漢文史料はパルティア帝国の領域とソグデリアナとの重なりについて否

定的である。逆に肯定的に捉える文献・研究は今までないようである。<sup>12</sup> 安息国とブハラの一視という誤解につながる地理的知見は少なくとも漢代の中国にはなかったと言えることができる。

## (一)

安息国の名を記録した魏晋南北朝時代の主要な史料は、すでに前稿で考察した。その結果、六世紀中頃より前にはブハラと安息国を混同する見解がなかったが、北周時代になるとブハラが安息国の名をもって現れることが明らかになっている。<sup>13</sup> そしてちょうどこの頃、安国の名称も現れてくる。これについて、以下の音楽関係史料が参考になる。

始開皇初定令、置七部樂。一曰国伎、二曰清商伎、三曰高麗伎、四曰天竺伎、五曰安国伎、六曰龜茲伎、七曰文康伎。…（中略）…疏勒・安国・高麗、並起自後魏平馮氏及通西域、因得其伎。（後略）

〔隋書〕卷一五、志一〇、音樂下

〔劉昫太樂令壁記〕…（中略）…周武帝有龜茲・疏勒・安国・康国之樂。（後略）

〔玉海〕卷一〇六、十部伎の条所引、劉昫『太樂令壁記』

『隋書』音樂志下の引用後半にある北魏の北燕馮氏平定、西域諸国との通行の活発化は、西曆四三〇年代後半から四四〇年代のことなので、この史料によれば安国樂の中国伝来はこれ以降ということになる。<sup>14</sup> それでは安国樂ひいては安国の名も五世紀の北魏時代からあったと解釈できるであろうか。ところが現存の北魏関連文献中に安国の名は見出せない。安国はブハラに相当するが、用字から考えればブハラの現地国名(Bukhara, Numijkad)の音写でないことは明らかである。そして特に隋唐史料上での同一視を考慮すれば、安国の名は、直接的か間接的かは別として、安息国に由来するというほか説明がつかない。<sup>15</sup> 言いかえれば安国の名の成立はブハラと安息国との同一視が前提となっているのである。ところが『魏書』西域伝には、ブハラは怛密国(=Numijkad)の名で記

録され安息国と関係づけられておらず、別に安息国の条も立てられているが、これは過去の安息国の記録の焼き直しに過ぎない。<sup>16</sup> そして安国の名も出てこない。当時兩國の同一視や安国の名称が存在していたなら、このような記述と矛盾する。よって『魏書』西域伝に基づけば、「安国」や「安国楽」の名称が北魏時代にすでにあつたとは考えられない。一方安国楽は、『隋書』音楽志によれば隋初に、そして『太楽令壁記』の引用によれば北周武帝時代にもあつたとされるので、後者の時代から存在を確認できる。以上から、安国楽は、起源が北魏時代（五世紀）にあつたとしても、名称や形式が確立したのは北周武帝時代であろうと筆者は考える。そして安国の名は北魏滅亡後から北周武帝時代の間につくられたと推定する。

このように安国の名称成立もブハラと漢代の安息国の同一視の一般化した時期（六世紀中頃）にほぼ重なると見てよい。

### (二)

現存史料のうち、ブハラ（安国）と漢代の安息国との同一視が明確に述べられる最初は『隋書』卷八三西域伝の安国の条である。先行研究によれば『隋書』西域伝は、隋朝廷の文書や裴矩『西域図記』・韋節『西蕃記』が主な原史料とされるので、全体的に同時代の記録が盛られていると見てよい。<sup>18</sup>

同書西域伝の安国の条は以下の通り。

安国、漢時安息国也。王、姓昭武氏、与康国王同族、字設力登。妻、康国王女也。都在那密水南、城有五重、環以流水。宫殿皆为平頭。王坐金駝座、高七八尺。每聽政、与妻相对大臣三人、評理国事。風俗同於康国。

唯妻其姊妹及母子遞相禽獸、此為異也。煬帝即位之後、遣司隸從事杜行滿使於西域、至其国、得五色塩而返。国之西百余里有畢国、可千余家、其国無君長、安国統之。大業五年、遣使貢獻、後遂絶焉。

ここで特に注目するのは漢代の安息国の地とされている点であるが、ソグディアナ周辺の地域で同様の記述が

あるのは以下の穆国と烏那曷国の条である。<sup>19)</sup>

烏那曷国、都烏澹水西、旧安息之地也。王、姓昭武、亦康国種類、字仏食。都城方二里。勝兵数百人。王坐金羊座。東北去安国四百里。西北去穆国二百余里。東去瓜州七千五百里。大業中、遣使貢方物。

（同伝、烏那曷国の条）

穆国、都烏澹河之西、亦安息之故地、与烏那曷為鄰。其王、姓昭武、亦康国王之種類也、字阿濫密。都城方三里。勝兵二千人。東北去安国五百里、東去烏那曷二百余里、西去波斯国四千余里、東去瓜州七千七百里。大業中、遣使貢方物。

（同伝、穆国の条）

これらの国々が漢代の安息国の地とされている根拠を探すと、安国と穆国・烏那曷国の間に違いがあることが分る。後の二国はいずれも地理的位置が烏澹水の西とされている。烏澹水はアム川のことと漢代の嬌水に当たる<sup>20)</sup>。先に述べたとおり、漢代の史書にはこの川の西岸までパルティア帝国の領土が及んでいたと書かれている。これによって『隋書』西域伝あるいはその原史料の編者はこの二国を安息国の故地と判断したに違いない。つまりこの比定は、史実かどうかは別として地理的根拠があると言える。

一方、安国の条には地理的根拠を直接示す記述はなく、烏澹水との関係も書かれていない。地理的位置は那密水（ザラフシャン川）によって示されている。この川のほとりにある国としては他に米国・曹国・何国があるが、みな漢代の康居国の地とされていて、安国のみ異なっている。安国は、同じソグディアナで同じ川の流域にあるとされているが、地理的根拠がまったく示されぬまま安息国の故地とされているのである。これはなぜであろうか。ここで北周時代にプハラ（安国）と安息国がすでに同一視されていたことを思い起こしてみよう。そうすると、隋代には両国の同一視がもう常識化していて、この先入観から上記の記述がなされたのであって、何らかの地理的根拠に基づくのではないと考えれば説明がつく。安国の場合、同じく漢代の

安息国の地とされていても穆国・烏那曷国とは理由が違うのであって、何らかの史実や地理的事実が反映されていると見なすことはできない。

前稿に加え、本節で明らかになったのは、ブハラと安息国との同一視の生じる余地は漢代から六世紀中頃までの西域地理の記録・知識の中にはないということである。同一視は文献上、北周以降に非常に唐突な形で現れているのがわかるであろう。

## 第二節 漢代から南北朝時代にかけての安姓の胡人

ここでは漢代から南北朝時代にかけての安姓の胡人の民族性の特定を試みる。安姓の胡人の記録は数多いが、民族性・出自の背景等まで明示されたものは少ない。本稿は安姓の人名の網羅的集成・考察を目的とはしていないので、各時代ごとの民族性特定の参考になる事例のみ取り上げることとした。<sup>(21)</sup>

### (一)

記録上最初に現れる安姓の胡人は、後漢末に活動した安世高・安玄であり、その出身は安息国と明記されている。<sup>(22)</sup> 兩人の出自・活動時期から考えると、胡姓としての安姓は後漢末から三国時代にかけての成立であり、安息以外に語源は考えられない。<sup>(23)</sup> 前節で述べたように漢代の安息国はパルティア帝国であるので、兩人はその領内出身と解釈すべきである。<sup>(24)</sup> 当時ソグディアナは、漢文史料によれば地理的に安息国と区別されており、特に後漢時代には康居の支配下にあつたことが明らかである。したがってその頃から安姓の胡人の実体が後世のようにソグド人であつたとは考えられない。

(一)

梁元帝撰『梁職貢図』（五四〇年頃成立<sup>25</sup>）の末国（メルヴ）使の条は安姓に関係する記述を含むのでここで考察しておく。『梁職貢図』の唯一の現存模本である中国歴史博物館蔵本には残欠部がかなりある。しかし『梁職貢図』の現存部分を全体的に見ると、この記録が『梁書』卷五四諸夷伝の史料源であることは明らかなので、かなりの部分が復元可能である。末国（メルヴ）について見てみると『梁書』卷五四諸夷伝には、

末国、漢世且末国也。勝兵万余戸、北与丁零、東与白題、西与波斯接。土人剪髮、著氍帽・小袖衣、為衫則開頸而縫前。多牛羊騾驢。其王安末深盤、普通五年、遣使來貢獻。

とある。これに対応する『梁職貢図』末国使の条は、先行研究を勘案して主な残存部分を復元すると次のようになる。

末國使

末國、漢世且末國□□勝兵万餘戸「後欠」

題接、西與波斯接。土人剪髮、着(氍)「後欠」

騾驢。今(王)(姓)安、名末深盤「後欠」

\* 文字の一部残存部のうち、( ) ↓復元部 □ ↓判読不能

問題とするのは「今王姓安、名末深盤」の部分であるが、この読みは先行研究間に違いがある。しかし以下の理由から上記の読みは確定的である。まず「王姓」としたのは、『梁職貢図』の編者が明らかに王姓の採録を意図していたためである。『梁職貢図』白題国（バルフ）使の条には「国王姓支、名使（稽）毅」とあり、それに対応する『梁書』諸夷伝、白題国の条にも「白題国、王姓支、名史稽毅」とあることからわかる。次に「名」は、「石」と読む研究もあるが、そうするとこの字が『梁書』側の「其王安末深盤」にはなく合わない。『梁職貢図』

の写真版を見るとこの字の左上部分は残欠しており、「石」以外の読みは可能である。そして上記二史料の白題国の王名が「王姓く名く」の形式で書かれていることを考え合わせれば、末国の王名は「今王姓安、名末黍盤」と復元するのが正しい。そうすれば『梁書』の記述とも矛盾しない。

ところで『梁職貢図』に出てくる末国・白題国の王姓は本物であろうか。支姓は月氏出身者、安姓は安息出身者が中国で古くからつけた胡姓である。しかし、漢人文化と直接の関係も梁朝との冊封関係もないにもかかわらず、これら国王自身が本国で中国既成の姓を付けていたとは思えない。しかも裏づけとなる記録は他になく事実ではあるまい。両国の「王姓」は『梁職貢図』の編者による「想定」と見てよいが、その原因は、白題国がバルフ付近、末国がメルヴ付近にあったため、前者が漢代の大月氏、後者が安息の地に当たると編者が理解したからに他ならない。つまり末国の王姓を安とした裏には、この地を安息に当てようとした編者の意図が読み取れるのである。<sup>29</sup>つまり『梁職貢図』からは安息国とバラハラの同一視を窺うことができなのであって、本書あるいは原史料の編者は安姓をソグド姓と認識していなかったことがわかるのである。

(二)

ところが隋唐時代の安姓のありようは本節(一)・(二)とはまったく異なる。中国では隋唐時代バラハラは安国と呼ばれていた。そして当時、ソグド人は出身国に従って特定の姓氏を名乗り、ソグド主要諸国はその姓氏に対応した形の国名で知られていた(例えばサマルカンド・康国/康姓)。そのため当時、安姓の胡人が安国(バラハラ)出身ソグド人であるのは自明のことであった。しかしバラハラが安息国として、あるいは安国の名でまだ理解されていない時代の場合、安姓がはたしてバラハラ出身者のものなのか判定するのは簡単ではない。<sup>30</sup>安姓の胡人とソグド人の関係は、隋唐時代に近いほどつかみやよくなってくるので、三〜五世紀前半より先に五世紀後半以降の時代の事例を取り上げる。

確証をもって、安姓のソグド人と認められる最初の事例は西魏時代の安諾槃陁であろう。『周書』卷五〇、異域伝下、突厥の条には、

大統十一（五四五年）年、（北周）太祖遣酒泉胡安諾槃陁使焉。

とある。「諾槃陁」は n. xubank というソグド語人名に比定できるので、ソグド人であることは間違いない。<sup>31</sup>そして安姓のソグド人でブハラ出身以外の者は知られていないので、安諾槃陁は本人か先祖がブハラ出身と見られる他に安吐根という「安息胡人」がいる。安吐根も酒泉出身の元商胡で、北魏末に外交活動に従事し、北斉の朝廷で有力者になった人物である。<sup>32</sup>この活動時期・経歴・姓氏の安諾槃陁との共通性を考えれば、安吐根もブハラ出身のソグド人であり、それが安姓を名乗り安息出身と称したと見てよい。この時代もしイラン本土出身であれば、当時の国名に従って波斯国出身とされ区別されたであろう。

このように六世紀半ばより前には、ブハラ出身ソグド人が安姓を名乗り安息国出身と称した習慣がすでに確立していたが、それはいつまで遡って確認できるであろうか。これを考えるうえで武威の安氏一族の家系記録が参考になる。唐代編纂の『元和姓纂』卷四、安氏の条には、

風俗通、漢有安成。廬山記、安高、安息王子入侍。姑臧涼州 出自安国。漢代遣子朝国、居涼土。後魏安難  
 隋至孫盤婆羅代居涼州、為薩宝。生興貴。執李軌送京師、以功拜右武衛大將軍・帰国公。（後略）<sup>33</sup>

という記録がある。涼州姑臧（＝武威）の安氏の出自は安国と明示されているが、注意すべき点もある。<sup>33</sup>「漢代遣子朝国、居涼土」はその前の一節により先祖が安息王子の安世高であることを暗示している。しかしこれは付会  
 で、安息国・安世高との関係は史実とは認められない。<sup>34</sup>一方この一族は難隋から代々涼州の薩宝であったという。  
 薩宝はソグド語のサルトパウ (Surt-paw) が語源であり、北朝・隋時代にソグド人集落を統括する役職であった。<sup>35</sup>  
 北朝末から隋唐時代にかけて、ソグド関係の職に就くと同時に安姓を名乗ったのはやはりブハラ出身者以外には

考えられない。だからこの一族はブハラ出身のソグド人と認められる。そして唐代にこの一族が安姓を名乗り安息国出身と称していた習慣は、系譜上つながりが確認できる以上、北魏の難陀の世代まで遡りうる。ただしその確証とまでこの史料を見なすことは、後の唐代史料なので無理かもしれない。安難陀は、北魏・東西魏時代を直接記述対象とした他の史料に名が出てこない<sup>(36)</sup>ので正確な生没年は不明である。しかし子孫の安元寿（興貴の子）の生年（西暦六〇七年）がわかっている<sup>(36)</sup>ので、これを元に一世代約三十年、本人の享年約七十年と仮定すると、難陀の生存時期は五世紀後半から六世紀中頃と推定できる。したがって、ブハラ出身ソグド人が安姓を名乗り安息国出身と称した習慣は五世紀後半にまで遡る可能性がある。

#### (四)

次に中間の、三世紀後半～五世紀前半の安姓の胡人を取り上げる<sup>(37)</sup>。この時代にはバルティア帝国はすでに滅亡していたが、中国では安息がイラン本土を指す地理的名称としてまだ使われていた<sup>(38)</sup>。一方この時代には中国国内の河西地方を中心にソグド人が流入していた。これが安姓の胡人の出身問題を難しくしている。

この時代、比較的詳しい伝記が残されているのが、安同（？―四二九）である。『魏書』卷三〇、安同伝には、  
安同、遼東胡人也。其先祖曰世高、漢時以安息王侍子入洛。歷魏至晋、避乱遼東、遂家焉。父屈、仕慕容暉、為殿中郎将。苻堅滅暉、屈友人公孫眷之妹没入苻氏宮、出賜劉庫仁為妻。庫仁貴寵之。同因隨眷商販、見太祖有濟世之才、遂留奉侍。（後略）

と出自が記録されている。最初の一節によると、先祖は（安）世高で、漢代に安息王の侍子（質子）として洛陽にやってきたという。しかし先行研究よればこの一節は史実とは認められない<sup>(39)</sup>。そのため、安世高の子孫であることを理由に、安同をバルティア民族の末裔と認定することはできない。その他にもバルティア帝国内から中国への大規模な移民の実例は知られていない。しかし帝国滅亡後も中国では安息の地名は使われていたので、イラ

ン本土からの後の移住者の可能性を考える必要はある。

関係する史料としては、インダス川上流（シヤティアル）の岩場で三〜四世紀の中期ベルシャ語・バルティヤ語の人名の書き付けが見つかっており、これは北西インドに向かうキャラヴァンに含まれる人々が残したと考えられている。<sup>④①</sup> これら言語を使用する者はイラン本土出身のはずで、アジア内陸の通商路を行き来していたことは確かである。だから中国に流入しなかったとも言いきれない。

これとは別に、安同は後世のようにブハラ出身のソグド人であったと考えることもできる。<sup>④②</sup>すでにこの頃中国国内にはソグド人が流入していた。安同の活動時期は先述の安難随の生存時期から百年も隔たっておらず、商業に従事していた点はソグド人と考えるのに有利である。しかしソグド人と特定するための確証は本人の伝記中に認められない。

結局現存史料の範囲で、安同あるいはその先祖の出身地をイラン本土・ソグディアナのどちらかに決定することは無理ということになる。

安同の他に同じ頃、涼州に安挾という胡人のいたことが確認できる。『晋書』卷一二二、呂纂載記には、後涼の呂纂の時代のこととして

即序胡安挾盜發張駿墓、…（中略）…（呂）纂誅安挾党五十余家、遣使弔祭駿、并繕修其墓。

とある。同様の佚文が諸書に残っており、それによればこの事件は後涼咸寧二（三九九）年のことで、安挾は涼州の胡人であることがわかるが、その帰属民族は明示していない。<sup>④③</sup>「即序胡」というのも西域胡ほどの意味しかなさそうである。<sup>④④</sup>結局その出身地もイラン本土・ソグディアナのどちらかに決定することは無理である。

本節の考察によって胡姓としての安姓の歴史をまとめると、安姓は、後漢から三国時代にかけてパルティア帝国内出身者の姓氏として成立し、これがソグド姓となったのは西暦五四五年以前で、五世紀後半に遡る可能性が

あるが、西暦四〇〇年頃まで遡るかどうかはわからない、ということになる。そして安姓を当初名乗った人々の出身国とブハラやソグデアナが異なる以上、安姓がソグド姓になったというのはとりもなおさずブハラ出身者に借用されたということである。

### 第三節 安息国とブハラの同一視の原因

いままでの考察によって、安息国・安国の名称と安姓は北周末までに成立したことが確認された。ここで三者の成立時期の先後を整理してみよう。最も古いのは安息で前漢時代に現れる。次が安姓で、後漢から三国時代にかけてバルティア帝国内出身者の姓氏として成立した。これがソグド姓として用いられるようになったのは西暦五四五年以前である。安国の名称の成立は六世紀中頃で、安息国・安姓の場合より遅れる。そしてブハラと安息国との同一視が一般化した時期も、前稿で述べたように六世紀中頃である。

両国の同一視は史実としては当然誤りである。しかもブハラやソグデアナがバルティア帝国に一時的にでも含まれていたことを立証する積極的な証拠もないようである。特に漢文史料の場合、今まで見てきたように、『史記』以降の記録を見ても、両国の同一視の歴史・地理的理由を窺える記述はまったく見つからない。

ところでこれは限られた現存史料のみのことではなさそうである。唐の賈耽は『古今郡国県道四夷述』四十巻を編纂して貞元一七（八〇二）年に朝廷に献上したが、その時の上奏文の中で、

（前略）并撰古今郡国県道四夷述四十巻、…（中略）…前西戎志以安国為安息、今則改入康居。凡諸疏舛、悉從釐正。（後略）  
（『旧唐書』卷一三八、賈耽伝）

と書き、以前の各種西域伝では安国を漢代の安息国としていたが、『古今郡国県道四夷述』では今これを改めて

漢代の康居の地を含めたと述べている。賈耽は唐代の優れた地理学者である。そして外国を含めた地理書を撰述したのであるから、漢代以降の西域地理に関する記録を十分参照しているに違いない。しかもそうした資料は現在より豊富であったはずである。それにも関わらず賈耽がこのように書いたのは、やはり当時においても、ブハラを含むソグディアナに対するパルティア帝国の支配・領有を具体的に示す記述を伝存文献中に見出せなかったからに他ならない。このようなことを示す点でも賈耽の記述は貴重である。よって、歴史地理上兩國を直接結び付けられる具体的な根拠は少なくとも中国の文献上知られず、時代を溯れば兩國は漢人にも地理的に混同されていなかったと見てよい。

したがって歴史地理学の観点からは、兩國の同一視が生じた理由を見つけることはできない。そしてその結果、漢人側の何らかの地理的見解に倣ってブハラ出身者が安息国出身を自称し安姓を名乗ったと考えるのも難しくなってしまう。しかしここで発想を逆転させてみたらどうか。今までの考察からは、兩國を直接結びつける言説で、地理的同一視に先立って存在していたのは、安姓のブハラ人自身による安息国出身との自称だけ、とわかった。そこで時間的先後から因果関係を考えれば、むしろ逆に、ブハラ出身者のこの習慣が原因で、その結果兩國の同一視が一般化したと見るのが妥当である。

前述の『梁職貢図』からは、五四〇年頃の段階でも、本書あるいは原史料の編者である漢人達（梁の元帝や官人達）の間では兩國の同一視は常識化していなかったことが窺える。おそらく漢人の民間にも同一視の生じる素地はなかったであろう。もともと遠い西域の一小国のブハラの名や存在など認知されていなかったと考えられるからである。また他のソグド人と区別できるブハラ出身者用の胡姓も存在しなかった。こうした状況では、国内での社会生活上必要であっても、ブハラ人が出身国名から姓氏を創出することはほとんど不可能であった。これに対してパミール以西の国名・胡姓として安息国・安姓は古くから存在しており、おそらくこちらの方が社

会的にとおりがよかったと思われる。そこでブハラ出身者は創出よりも借用という便法をとり、既存の安姓を名乗り安息国出身と自称したのであろう。そしてソグド人の中でサマルカンド出身者に次いで有力であったため、既存の安姓を専有できたのかもしれない。南北朝時代にはパルティア帝国はすでに滅んで久しく、この国出身者を先祖とする人々が中国に少なかったことも都合がよかったのであろう。

安息をイラン本土と解して、これとソグド人との関係を求めれば、確かに強い文化的共通性・経済的關係を認めることはできる。ソグド人の信仰したゾロアスター教はイランの中心的宗教であり、マニ教はササン朝領内で発生した。また経済面では、ササン朝銀貨のソグディアナへの波及・影響や、前節で述べたようにキヤラヴァンでの往来上イラン本土出身者と交渉もあった。こうした共通性や關係が安姓の借用の背景にあったのかもしれない。しかしソグド人と安姓・安息国や当時のイラン本土の間にあつたのはせいぜいその程度の「關係」である<sup>45</sup>。それを越えて南北朝時代にブハラと、滅亡して久しいパルティア帝国との直接の歴史・地理的關係をブハラ出身者が独自に知りえていたとは思えないし、知りえなければ安姓を名乗れなかつたわけでもない。

ブハラ出身者の姓氏・出自に関する便法は一種の「冒姓」・出身国の「偽称」なのであるが、別に異常なことではない。当時の漢人の間では、自己の先祖・本籍を同姓の有名人・名族とその本籍(姓望)に仮託する習慣が一般化していた。ブハラ出身者のしたことはこれと大差ない。

そしてその後の事態は次のような経過をたどつたと見る。中国国内には、安息国出身を自称するブハラ出身者がふえるにつれて、「安国(ブハラ)＝旧安息国」の言説が普及し(「嘘も百回言えば真になる」の事態、もともとそのような言説・知見と無縁の漢人の側にも一種の常識として受け入れられ史実と見なされるようになる。単純化して言えば(名の借用)から(実体の同一視)が誤まって導き出されたというわけである。このように考えれば、ブハラと漢代の安息国との同一視の生じる余地がどの地理書にも見当たらないのは当然のことと言える。『隋書』

西域伝・安国の条の成立にはこのような背景があったのであろう。この傾向は唐代以降においても同じであった。『通典』边防典では安息国と安国は完全に同一視され、両者は一括して記録されている。賈耽はさすがに同一視の誤りを看破したが、この見解はすぐには主流とならず、宋代編纂の『太平寰宇記』卷一八四は『通典』の記述形式を踏襲している。<sup>46</sup>

さらに唐代において両国の同一視は地理書を越えて遂には行政の分野まで波及した。唐朝は顕慶三年に西突厥の阿史那賀魯を破り、その影響力を排除したパミール以西諸国に名目的な羈縻州を置いたが、ブハラは羈縻州は「安息州」と命名されたのである。<sup>47</sup>

こうしてみると、中国来住ブハラ人が漢化の過程で取った便法が、次に思いがけない形で逆に漢人側に影響を及ぼし、正しい方向へではなかったものの、当時の漢人の外国認識を変えさせたと評することができよう。

## おわりに

本稿では、安息国・安国関係の、前稿では扱わなかった地理的記録と安姓の胡人の記録を考察し、その結果、次の二点の結論を得た。

- ①漢文文献に基づくかぎり、六世紀中頃までに西域地理について漢人自身が得た情報・知識には、ブハラと漢代の安息国の同一視につながるような誤りは認められない。
  - ②それにもかかわらず六世紀中頃に両国の同一視が中国で一般化したのは、これに先立ってブハラ出身ソグド人が便宜的に安姓を借用し安息国出身を自称したためである。
- 中国に来住したソグド人は単に漢化しただけでなく、漢人社会に様々な影響を与えたことはよく知られている。

しかしその影響が外国地理の認識という知的分野にまで及んでいることは今までまったく想像すらされなかった。これは、漢人の外国地理の認識と中国来住異民族の漢化が相互に結びつく研究課題だとは考えられなかったせいかもしれない。本稿の考察結果により、ソグド人が漢人社会に与えた独自の影響がまたひとつ明らかになったと言えよう。

## 註

(1) 齊藤達也「魏晋南北朝時代の安息国と安息系仏教僧」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』第一号、一九九八年)。安息国と安息の同一視・混同については他に、白鳥庫吉「粟特国考」(白鳥全集七収録、初出：一九二四年)九〇―九三頁、E. G. Pulleyblank, "An-hsi", *Et. vol. 1, fasc. 9*, pp. 999-1000, 参照。

(2) 現行本『史記』大宛列伝が後世『漢書』の関連記事を編集したものに過ぎず、独自の史料価値なしとする説が今までにあった。A. F. P. Hulstewé, *China in Central Asia: the Early Stage: 125 B. C.-A. D. 23*, Sinica Leidensia vol. 14 (Leiden: Brill, 1979)。しかしこれは榎一雄・余太山氏によって否定された。榎一雄「史記大宛伝と漢書張騫・李広利伝との関係について」(榎著作集七収録、初出：一九八三年)、余太山「《漢書・西域伝》与《史記・大宛伝》的關係」(余『研究』収録、初出：一九九六年)参照。

(3) 桑原隲藏「張騫の遠征」(桑原全集三収録、初出：一九一六年)、二七六―二九三頁。

(4) パルティア帝国の歴史については、CHI 3 (1), pp. 21-99, Jozef Wolski, *L'Empire des Arsacides*, Acta Iranica 32, (Leuven: Peeters, 1993) 参照。漢代の安息国の記述は、パルティアに関する古典ギリシヤ語・ラテン語史料や考古学的研究の結果と一致していることが、一八世紀以降西洋の学者達によって指摘されてきた。その結果漢代の安息国はパルティア帝国であることが確定している。漢代の安息国をパルティア帝国に当てた最初の人は、ヒルト(Hirth)によると、一八

世紀フランスのドゥギーニエ (J. De Guignes) らしむ。De Guignes, *Histoire générale des Huns*, vol. 2 (Paris: 1756-1757), p. 51. 一方「安息」の語源を Arsak (バルティア王家の名) であると最初に主張したのはキングスミル (T. W. Kingsmill) であつた。Kingsmill, "The Intercourse of China with Eastern Turkestan and Adjacent Countries in the Second Century B. C.," *Journal of the Royal Asiatic Society* 14 (1882), p. 81. これらの見解は、やはり一九世紀末にヒルトがさらに詳しく論じてからはほぼ定説となつた。以上、Hirt, *Roman Orient*, pp. 139-143 参照。

- (5) Marguart, *Wehrol*, pp. 2-3, 49.
- (6) 当時ソグディアナを支配下においたのを康居とするのは白鳥庫吉・余太山氏、大月氏とするのは桑原隲藏氏である。前掲註(1)白鳥「粟特国考」五六頁、余『要注』五頁、註「二〇」、前掲註(3)桑原「張騫の遠征」二八五頁。
- (7) 岑仲勉『漢書西域伝地里校釈』上冊(中華書局、一九八一年)二四九―二五六頁、余太山『要注』一三四頁、註「三八一」。
- (8) 『後漢紀』卷一五孝殤皇帝紀にも安息国の記述があるが、鳩水やソグディアナとの位置関係は示されていない。この他にも後漢についての歴史書は数多くあつたが、ほとんど散逸した。その一つの『東觀漢記』の逸文中には永元十三年の安息国朝貢の記事があるが(呉樹平『東觀漢記校注』(中州古籍出版社、「鄭州」、一九八七年)八五九頁)、この国の地理的記述は現存していない。また、すでに散逸した各種『後漢書』の逸文が周天游『八家後漢書輯注』(上海古籍出版社、上海、一九八六年)に収められているが、その中には安息国の記述は見られない。
- (9) 長澤和俊「甘英の西使について」(同『シルク・ロード史研究』国書刊行会、一九七九年に収録、初出：一九七四年) 参照。
- (10) Hirth, *Roman Orient*, pp. 142-143, A. von Gutschmid, *Geschichte Irans und seiner Nachbarländer von Alexander dem Grossen bis zum Untergang der Arsaciden*, (Tübingen: Laupp, 1888 (rep. 1973)) pp. 65-66.

(11) 前掲註(1) 白鳥「粟特国考」六一―六八頁。

(12) 紀元前一世紀後半のギリシアの地理学者のイシドロスの『パルティア道里記』によると帝国領内東北方向への街道はマルギアナ(メルヴ)までにしか及んでいない。イシドロスは紀元前一世紀後半のギリシアの地理学者で、この書でパルティア帝国領内の街道を記述した。ただしこれに描かれている時代は著者本人ではなく、パルティア最盛期のミトリダーテス二世時代(前二二四―前八八年)であるらしい。以上、山本弘道「イシドロスのパルティア道里記」訳註(松田寿男博士古稀記念出版委員会編『東西文化交流史』雄山閣出版、一九七五年)参照。パルティア最盛期も帝国の東北域はメルヴ地方まであったと推定される。

パルティア帝国がソグディアナを領有していたかどうかについて論じた研究はほとんどない。ガリブ(B. Garib)は、パルティアがソグディアナを領有していたかどうかはわからないと言う。Garib, *Sogdian Dictionary*, (Tehran: Farhangsan Publications, 1995), p. xv.

(13) 斉藤前掲論文、一六三―一六五頁。またソグディアナは「粟弋」・「粟特」等の名で魏晋南北朝時代の正史の中にもいくつか記述があるが、その中に、この地と安息国・イランとの混同が生じる余地は見当らない。これらの記述については、前掲註(1) 白鳥「粟特国考」六一―六八頁、榎一雄「魏書粟特国伝と匈奴・フン同族問題」(榎著作集三収録、初出：一九五五年)二四―四四頁参照。

(14) 岸辺成雄『唐代音楽の歴史的研究―楽制篇―』下巻(東京大学出版会、一九六一年、復刻版、和泉書院、二〇〇五年)一八四、二五三―二五七、五〇二頁。北燕滅亡は四三八年、西域に通じる河西地方の北涼平定は四三九年。北魏と西域諸国との通交については伊瀬仙太郎『中国西域経営史研究』(巖南堂、一九六八年)一一七―一四七頁、参照。

(15) 定説では安姓・安国の語は共に直接「安息」の縮約によりつくられたとされる。しかし筆者は、それぞれの語の成立時期の違いを一理由として、安息を語源として安姓が成立し、後に、プハラ・安息ではなく安姓を直接の語源として安

国の国名が成立したと考える。またブハラは安息国と同一視されながら、同時に安国という別名を有したというののも一つの問題である。これらは別の大きな研究課題であるので、稿を改めて他のソグド姓・国名の成立と共に考察したい。

(16) 斉藤前稿、一六五―一六八頁。前稿でも触れたとおり『魏書』の安息国・忸密国伝の成立は西暦五五四年の同書初撰時である。同書卷八、世宗紀には忸密国の永平二（五〇九）年朝貢が伝えられているので、その時にこの国の名と情報 が中国に伝わったのであろう。

(17) 対応する記事は『通典』楽典・『旧唐書』音楽志にもあるが、これらは『太楽令壁記』を直接・間接の情報源にして いる。岸边成雄「唐代音楽文献概説」（同『唐代音楽の歴史的研究』続巻・楽理篇 楽書篇 楽器篇 楽人篇）和泉 書院、二〇〇五年に収録、初出：一九三七年）二〇四―二〇五頁参照。

(18) 『隋書』西域伝の成り立ちについては以下の論文参照。嶋崎昌氏は、同書西域伝の高昌国の条が『西域図記』佚文と 共通の記述を含むことを指摘し、また北村高氏は、同書西域伝と『西域図記』序文に共通の国名を挙げ、両氏とも、『西域図記』が『隋書』西域伝編纂に利用されたとしている。嶋崎昌「西域交通史上の新道と伊吾路」（同『隋唐時代の 東トウルキスタン研究―高昌国史研究を中心として―』東京大学出版会、一九七七年、四六七―四九三頁所収、初出： 一九五六年）、同『隋書』西域伝解説（嶋崎前掲書、三一―三三〇頁所収、初出：一九六一年）、北村高「隋書」 西域伝について―その成立と若干の問題―（『龍谷史壇』七八号、一九八〇年、三一―四五頁）。これに対し余太山氏 はいくつかの理由を挙げて、同書西域伝・『西域図記』間の記述の共通点を、前者の編纂上後者が参照された確証とは 認めず、隋朝政府の公文書を前者編纂の来源と見なしている。余太山「『隋書』西域伝』的若干問題」（『新疆師範大学 学报（哲学社会科学版）』第二五卷第三期、二〇〇四年、五〇―五四頁）。余氏の意見は傾聴すべき点があるが、両書共 通の記述・国名の存在を否定し得たわけではない。だから少なくとも部分的あるいは間接的には『西域図記』が『隋 書』西域伝編纂に用いられたと見るのが穏当であらう。裴矩『西域図記』については、内田吟風「隋裴矩撰『西域図

記「遺文纂考」(藤原弘道先生古希記念史学仏教学論集)藤原弘道先生古希記念会、一九七三年)参照。韋節の西域遣使とその記録の『西蕃記』については、長澤和俊「韋節・杜行滿の西使」(同『シルク・ロード史研究』国書刊行会、一九七九年、初出・一九六五年)参照。

(19) 穆国の地名比定についてはアムル説を採るのは、マルクワルト・白鳥庫吉である。Marquart, *Eranische*, p. 311、前掲註(一)白鳥「粟特国考」九三―九五頁。他にメルヴ説もありトマシエクが( )の説を採る。W. Tomaschek, "Centralasiatische Studien," *Sitzungsberichte der Philosophisch-Historischen Classe der Kaiserliche Akademie der Wissenschaften*, Bd. 87, 1 Hft. (1877) p. 167, 175。烏那曷国は現在の Anduhui に当たるといふ意見もあるが、定説はないようである。前掲註

(一) 白鳥「粟特国考」九五―九六頁参照。

(20) Marquart, *Wehrh.*, pp. 47-50.

(21) 安姓の胡人の事例を集成した代表的研究としては、姚薇元『北朝胡姓考』(科学出版社、北京、一九五八年)、陳連慶『中国古代少数民族姓氏研究』(吉林文史出版社、長春、一九九三年)、唐代の安姓を含むソグド姓墓誌の集成・考察としては、福島恵「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」(『学習院史学』四三、二〇〇五年)がある。また安姓の胡人の活動については、桑原隲蔵「隋唐時代に支那に來住した西域人について」(桑原全集二収録、初出・一九二六年)、後藤勝「西域胡安氏の活動と漢化過程」(『会報』七、岐阜県高等学校社会科教育研究会、一九六八年)がある。吉藏など魏晉南北朝時代の安姓の仏教僧については齊藤前稿の第二章参照。

(22) 僧祐『出三藏記集』卷一三・慧皎『高僧伝』卷一の安世高・安玄伝など。仏典に基づく安世高の伝記の概要については、宇井伯壽「安世高の研究」(同『訳経史研究』岩波書店、一九七一年)、Florin Deleann, "An Shigao: An Shigao and the History of the Anban shouyi jing 安般守意經" (『論叢アジアの文化と思想』二号 一九九三年)参照。

(23) 安世高の名が現れる最古の記録は後漢の嚴弘調の「沙弥十慧章句序」(『出三藏記集』卷一〇所収)である。ところが

安息国・安国とソグド人(齊藤)

これには、安世高の名が「有菩薩者、出自安息、字世高」（『大正』五五、六九頁下）とあり、出身国はわかるが姓氏が明示されない異例の形式で記されている。安玄の名は、当人生前あるいは後漢末までの記録には見出されない。続く安世高についての記録としては、三国時代の支謙「法句経序」（『大正』四、五六頁下、同五五、五〇頁上）・陳慧「陰持入経序」（『大正』三三、九頁中）があり、双方とも名を「安侯世高」と書いている。この「安侯」は二字で一体の称号なのか、安姓に侯をつけただけの敬称なのか判断しがたい。後世よく見られる形式でそろって安世高・安玄の姓名が現れるのは三国時代の康僧会（二四七―二八〇年に三国呉で活動）による記録からで、『出三藏記集』卷六所収の康僧会「安般注序第二」には「有菩薩者、名安清、字世高」（『大正』五五、四三頁中）、同「法鏡経序第十」には「騎都尉安玄」（『大正』五五、四六頁下）とある。これにより筆者は、安世高・安玄の生前あるいは後漢時代に胡姓としての安姓がまだ確立していなかった可能性を認めるので、その成立時期をやや広くとって後漢末から三国時代と考えている。

安世高の早期の記録については前掲註（22）字井『訳経史研究』五一―九頁参照。

(24) 別の説もある。荒牧典俊氏・桑山正進氏は、後漢の安世高に関わる安息国を、西北インドのバルティア王朝と解釈している。荒牧典俊・小南一郎訳『大乘仏典（中国・日本篇）』第三卷（中央公論社、一九九三年）一三一九―一三〇頁、訳註（三〇）、桑山正進氏『カピシーラガングラ史研究』（京都大学人文科学研究所、一九九〇年）三六頁。ただし両氏はこの解釈の根拠を示していない。確かにバルティア帝国朝廷の文化的背景を考えると、皇族の中から安世高のような仏教僧が出たはずがない。しかし一方で筆者は、漢代中国内の漢人や西域出身者がインド・バルティア王朝を明確に認識しえたか疑問に思えるので、両氏のようにそこまで特定する解釈には同意し兼ねる。

(25) 『梁職貢図』の概要・録文については、金維諾「職貢図の時代与作者―読画札記―」（『文物』一九六〇年第七期）、榎一雄「梁職貢図について」（榎著作集七収録、初出・一九六三年）、同「描かれた倭人の使節―北京博物館蔵「職貢図巻」―」（榎著作集七収録、初出・一九八五年）、余太山「《梁書・西北諸戎伝》与《梁職貢図》―兼説今存《梁職貢図》

残卷与裴子野《方国使図》的關係―(余『研究』収録)参照。末国をメルヴ、白題国をバルフに当てるのもこれらの研究による。

(26) 前掲註(25) 榎「梁職貢図について」一一八一―一二三頁。特に『梁職貢図』と『梁書』の滑国(エフタル)の記事の対応関係は、榎一雄「滑国に関する梁職貢図の記事について」(榎著作集七、初出・一九六四年)において逐条的に考察されている。

(27) 「今王姓安、名末柔盤」は金維諾氏の復元であるが、その根拠は示されていない。前掲註(25) 金論文二一四頁。「王姓」のところが榎氏は「二生(姓?)」、余氏は「王姓」とする。また「名」を榎・余氏は「石」とする。前掲註(25) 榎「描かれた倭人の使節」一七四頁、余『研究』五七頁。先行する金維諾氏の復元に、これを参照しているはずの榎・余氏が従わなかった理由は示されていない。

(28) 榎著作集七、一一〇頁の後にある『梁職貢図卷』の写真版。

(29) 末国使の条の冒頭には「漢世且末国」とあり矛盾するが、この条の情報源は単一ではないということであろう。

(30) 本稿で扱う安同・安諾槃随・安吐根に関する『魏書』・『周書』・『北史』の記録は後代のものであるが、その中の三人の姓名・出自自体は、後代の編集時に大きな変更が必要となる不都合が想定できないので、当人生前あるいは原史料のものほぼ踏襲されていると考える。

さらに近年、北周の薩保であった安伽(五一八―五七九)という人物の墓が西安近郊で発見された。その墓葬の状況から当人はソグド人であるとして問題ない。しかし墓内出土の墓誌銘には当人や先祖の西域出身は明示されておらず、また活動時期が安諾槃随とほぼ重なるので、本文では取り上げなかった。陝西省考古研究所「西安発現的安伽墓」・韓偉「北周安伽墓甬石榻之相關問題浅見」(『文物』二〇〇一年第一期)参照。

(31) J. Harmatta, "Trano-Turkica," *AOH 25* (1972), p. 273<sup>7</sup> 吉田豊氏 *SUI-1-2* *S* 書評 (BSOAS 57-1/2 (1994)), p. 391 参照。

安息国・安国とソグド人(齊藤)

Birk (ソグド語「しもべ」の意)の語はソグド語人名中に数多く見られる構成要素である。Helmut Humbach, "Die sogdischen Inschriftenkunde vom oberen Indus (Pakistan)," *Beiträge zur allgemeinen und vergleichenden Archäologie*, Bd. 2 (1980), pp. 203-204; *UI 2*, pp. 39-83, *Glossary* 参照。漢文文献中でも、これに類似の音の漢字による個人名を持つ人物が多く見られ、その姓氏の多くは隋唐のソグド姓(康国・史国・何国など隋唐のソグド国名に対応した姓氏)の範囲に含まれ、またその墓誌史料などの場合、当人や先祖の母国がソグド諸国であることを明記している例もかなりある。したがって北朝末から隋唐にかけて「罽随」・「畔陀」などの個人名を持つ西域出身者はソグド人と見てよい。

- (32) 「安吐根、安息胡人、曾祖入魏、家於酒泉。吐根魏末充使蠕蠕、因留塞北。天平初(五三四年頃)、蠕蠕主使至晋陽、吐根密啓本蕃情状、神武(高歡)得為之備。」(『北史』卷九十二、恩幸伝、安吐根の条)

「安吐根繼進曰、臣本商胡、得在諸貴行末、……」(同伝、和士開の条)

安吐根については前掲註(21)後藤論文と、後藤勝「ソグド系帰化人安吐根について―西域帰化人研究その三―」(『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第一六、一九八八年)参照。前者の論文三九頁は、吐根の曾祖父の酒泉來住を五世紀前半とする。

- (33) この一節に対応する『新唐書』卷七五下、宰相世系表五、武威李氏の条では出自が「安息国」となっているため、フォルテ氏 (Antonio Forte) は、『元和姓纂』側の「出自安国」を誤りとする。そして『元和姓纂』側にも漢代の記述が含まれる一方、安国の名称は漢代になかったことを理由に「出自安(息)国」を正しい原文と見なしている。これによりフォルテ氏は、武威の安氏一族が安国(ブハラ)でなく安息国(バルティア帝国)出身であることは間違いないとす<sup>33)</sup>。Forte, "Kuwabara's Misleading Thesis on Bukhara and the Family Name An An," *JASO* 116-4, (1996), pp. 649-650 参照。<sup>33)</sup>しかしこの記録の作られた唐代には安国と漢代の安息国を誤って同一視する見解が一般化されていたことを思い起こすべきである。それゆえ当時の安姓の伝記史料の場合、安息国出身と安国出身の区別はあまり意味がない。したがって、

漢代安息国の事柄が出自の記録に含まれているからといって「安国」の出自を否定することはできない。

(34) フォルテ氏は、『魏書』安同伝と武威安氏の家系諸史料が一族の先祖を安息出身侍子の安世高としているのを主な根拠として、安世高は安息国から後漢へ送られた質子であり、その直接の子孫が安同・武威安氏一族であると力説している。Forste, "An Shigao 安世高 and his Descendants", 『仏教史学研究』第二五卷一、一九九二年）、同 *An Shigao*。

これらはデレアヌ フロリン・呉玉貴・榮新江の三氏によって否定されている。その主な根拠は以下のように三つにまとめられよう。「1」安世高から安同の父まで百年以上空白がある。また僧伝史料による安世高の活動地域（洛陽・中国南方）と、安同・武威安氏の伝記史料に書かれた先祖の居住・移住地域（各々遼東・河西）のくいちがいがあ

これらの空白やくいちがいを埋められる史料はない。「2」魏晋から隋唐時代にかけて中国の伝記史料では、先祖を同姓の過去の著名人に付会する習慣が一般的であったので、安同・武威安氏の遠い先祖の記録も単純には信用できない。

「3」武威安氏の家系諸史料間には様々なくいちがいがあ

都督安公（忠敬）碑銘」（張説『張燕公集』卷一九）の安同と武威安氏をつなぐ系譜には明らかに偽造が認められる。前掲註（22）Deleury 論文、呉玉貴「涼州粟特胡人安氏家族研究」（『唐研究』三、一九九七年）、榮新江「富安敦《質子

安世高及其后裔》」（同『中古中国与外来文明』三聯・哈巴燕京學術叢書、三聯書店、北京、二〇〇一年に収録、初出・一九九八年）参照。三氏による否定説には説得力があり、これ以後フォルテ氏に賛成する説はあがっていないようである。なお、前述「安忠敬碑」による系譜の偽造は前掲註（21）後藤論文四九一五二頁ですでに指摘されていることも付言しておく。

(35) 吉田豊「ソグド語雑録（2）」（『オリエント』三一巻二、一九八八年）一六八―一七一頁、荒川正晴「北朝隋・唐代における「薩宝」の性格をめぐって」（『東洋史苑』五一号、一九九八年）参照。

(36) 安興貴一族については前掲註（34）呉論文、山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団―天理図書館所蔵『文館史林』

安息国・安国とソグド人（齊藤）

「安修仁墓碑銘」残卷をめくって―」（『東方学』一一〇、二〇〇五年）参照。

- (37) 唐代に安万通（葬年永徽五（六五四）年、享年六九）という人物がおり、「唐騎都尉安万通墨書磚墓誌銘」によると、先祖は安息国出身で、高祖の安但は北魏の初め頃薩宝であったと記録されている。墓誌銘は『全唐文補遺』第二冊（三秦出版社、西安一九九五年）一二九—一三〇頁所収。しかしもし安万通の葬年を没年とほぼ同じと考え、当人から一世代三〇年で計算すると、安但は五世紀中頃以後の生まれになってしまう。この墓誌は本当に安但について事実を伝えているのか疑問なので、本稿では史料としての利用を保留した。

(38) 斉藤前稿参照。

(39) 前掲註（34）参照。

- (40) バルティア語・中期ペルシア語の人名が各々二つ発見されている。これとは別に、同所のソグド文字による数多くの人名の書き付けの中にも前記の二言語起源の人名が含まれているという。Nicholas Sims-Williams “The Iranian Inscriptions of Shatal”, *JT* Vol. XXIII-XXIV, (1997-1998), pp. 523-524, 529.

(41) 榮新江氏は安同一族をソグディアナ出身であろうとする。前掲註（34）榮書評、四三四頁。

- (42) 安坻に関する史料は、どれも零細なものばかりであるが、多くは北涼の段龜龍撰『涼州記』の佚文として伝わっている。『涼州記』並序の研究と校注』（『史滴』六号、一九八五年）七六一—八〇頁参照。おそらく『涼州記』が安坻についての原史料であろう。

- (43) 『尚書』禹貢篇に「織皮、崑崙・析支・渠搜、西戎即序」とある。「即序」の意味は「つき従う」らしいが、この解釈は必ずしも確定してはいないようである。池田末利『尚書』（全釈漢文大系一一、集英社、一九七六年）一四四、一四八—一四九頁参照。この一句は『漢書』や『魏書』の西域伝にも引用され、また張俊「為呉令謝詢求為諸孫置守家人表」（『文選』卷三八）にも「西戎有即序之人」という表現がある。このように「即序」は西戎と関係の深い語であるの

で、「即序胡」は西域胡と解することができる。

- (44) 賈耽の『古今郡国県道四夷述』については、榎一雄「賈耽の地理書と道里記の称に就いて」（榎著作集七収録、初出…一九三六年）参照。

- (45) ソグディアナをササン朝が直接領有したかどうかも一つの問題であるが、榎一雄氏は様々な文献・研究を参照した結果、その領有を確実に肯定・否定できる史料はないとしている。榎「ソグディアナと匈奴」（榎著作集三収録、初出…一九五五年）五八―六三頁参照。榎論文が直接取り上げなかったイランのナクシュイールスタム遺跡のシャープール一世の碑文にはササン朝の領域の記述がありソグディアナは領内に含められている。しかしこの記述の信憑性には賛否両論があり、現状ではササン朝のソグディアナ領有の確証とは言えないようである。CHI 3 (1), pp. 126-127, 257-258; B. A. Litvinsky, ed. *History of Civilizations of Central Asia*, vol. III, Multiple History Series, (Paris: UNESCO, 1996), pp. 103-104 参照。

- (46) しかしさらに後の『新唐書』巻一四六下、西域伝下には賈耽の見解が生かされているようであり、当伝の安(国)の条は当地を「康居小君長鬪王故地」とし、漢代の安息国とまったく関係づけていない。

- (47) 『新唐書』巻一四六下、西域伝下の安(国)の条はその都城を「阿湫謐城」とし、同伝の東安(国)（＝現在のザラフシヤン川中流のカルカンアタ付近）の条は「顕慶時、以阿湫為安息州、即以其王昭武殺為刺史、饜斤為木鹿州、以其王昭武閉息為刺史」とする。この鞬廝州設置の年代・背景については劉統『唐代鞬廝府州研究』（西北大学出版社、西安、一九九八年）一二七―一二八頁参照。

## 略号・参考文献

榎著作集 榎一雄著作集編集委員会編『榎一雄著作集』第一巻、第二巻、汲古書院、一九九二―一九九四年。

安息国・安国とソグド人（斉藤）

桑原全集 『桑原隨藏全集』 第一～五卷、別冊、岩波書店、一九六八年。

白鳥全集 『白鳥庫吉全集』 第一卷～第一〇卷、岩波書店、一九六九年。

『大正』 大正新脩大藏經

余『研究』 余太山 『兩漢魏晉南北朝正史西域伝研究』 中華書局、北京、二〇〇三年。

余『要注』 余太山 『兩漢魏晉南北朝正史西域伝要注』 中華書局、北京、二〇〇五年。

荒牧典俊・小南一郎訳 『大乘仏典（中国・日本篇）』 第三卷、中央公論社、一九九三年。

池田末利 『尚書』 全釈漢文大系一一、集英社、一九七六年。

伊瀬仙太郎 『中国西域経営史研究』 巖南堂、一九六八年。

宇井伯壽 『訳経史研究』 岩波書店、一九七一年。

榮新江 『中古中国与外来文明』 三聯・哈仏燕京學術叢書、三聯書店、北京、二〇〇一年。

岸辺成雄 『唐代音楽の歴史的研究―楽制篇―』 上・下巻、東京大学出版会、一九六〇―六一年（復刻版、和泉書院、二〇〇五年）。

岸辺成雄 『唐代音楽の歴史的研究―続巻―』 楽理篇 楽書篇 楽器篇 樂人篇―』 和泉書院、二〇〇五年。

桑山正進 『カピシーラガンターラ史研究』 京都大学人文科学研究所、一九九〇年。

嶋崎昌 『隋唐時代の東トウルキスタン研究―高昌国史研究を中心として―』 東京大学出版会、一九七七年。

陳連慶 『中国古代少数民族姓氏研究』 吉林文史出版社、長春、一九九三年。

長澤和俊 『シルク・ロード史研究』 国書刊行会、一九七九年。

姚薇元 『北朝胡姓考』 科学出版社、北京、一九五八年。

劉統『唐代羈糜府州研究』西北大学出版社、西安、一九九八年。

AOH *Acta Orientalia (Hungaricae)*

BSOAS *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*

CAI 3 (1) Yarshater, Ehsan ed., *Cambridge History of Iran*, vol. 3 (1), Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

EI Yarshater, Ehsan ed., *Encyclopedia Iranica*, London: Routledge, 1982–1998, New York: Bibliotheca Persica Press, 2000–.

IT *Indologica Taurinensia*

JAOS *Journal of the American Oriental Society*

JRAS *Journal of the Royal Asiatic Society*

UI Sims-Williams, Nicholas, *Sogdian and Other Iranian Inscriptions of the Upper Indus 1-2*, Corpus Inscriptionum Iranicarum pt. 2, vol. 3, London: School of Oriental and African Studies, 1989–1992.

Forse, Antonino, *The Hostage An Shigao and his Offspring: an Iranian Family in China*, Kyoto: Istituto Italiano di Cultura Scuola di Studi sull'Asia Orientale, 1995.

Gharib, B., *Sogdian Dictionary*, Tehran: Farhang Publications, 1995.

Gutschmid, Alfred von, *Geschichte Irans und seiner Nachbarländer von Alexander dem Grossen bis zum Untergang der Arsaciden*.

Tübingen: Laupp, 1888 (rep. 1973).

Hirth, Friedrich, *China and the Roman Orient: their Ancient and Medieval Relations as Represented in Old Chinese Records*, Leipzig:

Georg Hirth, 1885.

安息国・安国とソグド人（齊藤）

- Hulswé, Anthony Francois Paulus, *China in Central Asia: the Early Stage: 125 B. C.-A. D. 23*. Sinica Leidensia vol. 14. Leiden: Brill, 1979.
- Litvinsky, B. A. ed., *History of Civilisations of Central Asia*, vol. III. Multiple History Series. Paris: UNESCO, 1996.
- Marquart, Josef, *Wehrnot und Arang: Untersuchungen zur mythischen und geschichtlichen Landeskunde von Ostiran*. Leiden: Brill, 1938.
- Marquart, Josef, *Eransûhr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenuci*. Abhandlungen der Königl. Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Philologisch-historische Klasse, Neue Folge Bd. 3, Nr. 2. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1901.
- Wolski, Józef, *L'Empire des Arsacides*. Acta Iranica 32. Leuven: Peeters, 1993.

the Later Han to the Northern and Southern Dynasties (1<sup>st</sup> century-6<sup>th</sup> century). An analysis of the origin of these 'Barbarians' leads me to make some conjectures concerning the time when the Sogdians began to use the surname An. From the Later Han Dynasty to the Period of the Three Kingdoms 三國 (1<sup>st</sup> century-3<sup>rd</sup> century), the surname An 安 was used by people original from the Parthian Empire. Later on, it appears that Sogdians from Bukhara started to adopt the same surname. Such a situation is clearly attested in 545 C.E. and may go back as early as to the latter half of the 5<sup>th</sup> century.

In Chapter Three, I conclude that the erroneous identification of Bukhara with the 'Land of Anxi' did not come from first-hand geographical information obtained by the Chinese about the Western Regions. Its cause seems to be connected with the fact that the Sogdians from Bukhara began to borrow the surname An for their convenience and declared themselves to be original from the 'Land of Anxi'.

*Library Staff,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*

## Summary

### *Anxiguo* 安息國, *Anguo* 安國 and Sogdians

SAITÔ Tatuya

In a previous contribution (*Journal of the International College for Advanced Buddhist Studies* 国際仏教学大学院大学研究紀要, vol. I, 1998, pp. 176 ff.), I examined several problems connected to the precise identification of the Land of Anxi (*Anxiguo* 安息國) as reflected in Chinese sources dating back to the Wei, Jin, Northern and Southern Dynasties 魏晉南北朝 (3<sup>rd</sup>-6<sup>th</sup> centuries C.E.). My investigation revealed that by the middle of the 6<sup>th</sup> century, we witness the spread of a wrong identification of the Land of Anxi, which originally referred to the Parthian Empire, with Bukhara. The present study continues this line of research and casts further light upon the reasons behind this geographical confusion.

In Chapter One of my study, I examine relevant documents regarding the Land of Anxi in the Former Han 前漢 and Later Han 後漢 Dynasties (3<sup>rd</sup> century B.C.E.-3<sup>rd</sup> century C.E.) as well as later historical records on the Land of An 安國 (=Bukhara) in the Sui 隋 Dynasty (581-618). It appears that the mistaken identification of the two regions, which is clearly seen in the Chapter on the Western Regions 西域傳 of the *Suishu* 隋書, is not found in any source from the time of the Former Han Dynasty to the middle of the 6<sup>th</sup> century. The confusion seems to appear rather suddenly sometime after the middle of the 6<sup>th</sup> century. My data also reveals that while the name 'Land of Anxi' 安息國 is well-attested since the Former Han, the appellation 'Land of An' 安國 seems to have come into existence around the middle of the 6<sup>th</sup> century.

Chapter Two deals with the so-called 'Barbarians' 胡人 from the Western Regions who adopted the surname An 安 as reflected in Chinese sources from